

ベートーヴェン *L.v.Beethoven*

ロンド Op.51-1 ハ長調

ドイツのボンに生まれ、ウィーンで世を去ったルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)のOp.51としてある2曲の「ロンド」の第1番は、「ソナチネ・アルバム」にも収められ、ピアノを学ぶ人たちに愛奏されている珠玉の小品。1796~97年の作と推定されているこの曲は、モデラート・エ・グラツィオーソ、ハ長調で書かれ、優雅で格調高いロンド主題を中心に、流れるような展開を見せる。古典的なロンド形式にほぼ従いながら、ベートーヴェンの独創性も発揮されており、特に、ロンド主題が、繰り返されるたびに変奏されているところは注目される。

ピアノ・ソナタ 第23番 ヘ短調 Op.57「熱情」

ベートーヴェンの中期ピアノ・ソナタの傑作として名高い第23番は、1804~05年の作と推定されているが、「熱情」の名は、のちにハンプルクの出版社がつけたという。3楽章から成るこのソナタの構成は緻密であり、たとえば第1楽章の第1主題の構造は、第2楽章および第3楽章の主題と密接に関わっている。

第1楽章:アレグロ・アッサイ。ヘ短調、ソナタ形式。鋭い緊張感の漂う第1主題と、東の間の救いを思わせる第2主題を中心に、ドラマティックに展開する。

第2楽章:アンダンテ・コン・モート。変ニ長調、変奏曲形式。敬虔な祈りの感情をこめたような、コラル風の主題の後に、3つの変奏が続く。最後に主題が回想されたのち、突然のヘ短調の減七和音に導かれて、切れ目なく第3楽章に入る。

第3楽章:アレグロ・マ・ノン・トロppo。ヘ短調、ソナタ形式。荒れ狂う嵐のような楽想が次々に現れ、プレストによるコーダに至るまで、激しい展開を見せる。

リスト *F.Liszt*

フランツ・リスト(1811~86)は、超絶的な演奏技巧で名声を博した大ピアニストだった。ハンガリーのライディング(現在はオーストリア領)に生まれ、パリのサロンで人気を集め、ヨーロッパ全土を活動の場とした。そして、当時としては長寿を全うした彼は、指揮者、教育者としても活躍し、晩年は、宗教生活に入って大修道院長の称号を得た。

リストは、ピアノ独奏曲だけでも数百曲を書き残したとされる。ピアノ・ソナタ史上に輝くロ短調の「ソナタ」をはじめ、自身の優れた演奏技巧を披露するための練習曲集(「超絶技巧練習曲集」など)、さまざまな標題つきの作品ないし曲集(「巡礼の年」「詩的で宗教的な調べ」など)、祖国ハンガリーの音楽を素材とする作品(「ハンガリー狂詩曲」など)、舞曲の形式によるもの(「メフィスト・ワルツ」など)、時代を先取りしたような最晩年の作品(「暗い雲」など)、さらに、編曲作品もあり、ヴァラエティーに富んでいる。

詩的で宗教的な調べ S.173 より 第7曲「葬送曲」

リストがパリのサロンで出会った芸術家たちのなかに、フランスの詩人アルフォンス・ド・ラマルティエヌがいた。彼の詩集を読んで受けた感銘をもとに作曲された「詩的で宗教的な調べ」は、全10曲から成り、1853年に出版された。悲痛な曲想とドラマティックな展開が注目される第7曲「葬送曲」は、譜面に「葬送曲。1849年10月」とあることから、親しい友人の死を悼む曲と推定されている。その友人とは1849年10月17日に世を去ったショパンではないか、との説もあるが、リスト研究家ハンフリー・サールの著書には、フェリックス・リヒノフスキー侯爵、ラディスラウス・テレキー伯爵、ラヨシュ・バッチャーニ伯爵の名が挙げられている。3人とも1849年またはその前年に、政変のために命を落とした政治家であり、リストにとって大切な人たちだった。

忘れられたワルツ S.215より 第1番

4曲の「忘れられたワルツ」S.215のなかで、1881年に作曲された第1番は、アレグロ、嬰ヘ長調で書かれ、軽快に揺れ動くような流れが印象的な、サロン風の上品なワルツである。リスト最晩年の作ながら、簡素な書法により、過去への回想のようなノスタルジックな雰囲気曲であり、同じ時期のピアノ曲に顕著な、前衛的な作風とは異なっている。

「巡礼の年」第2年「イタリア」 S.161より 第5曲「ペトラルカのソネット 第104番」

リストが恋人のダゲー伯爵夫人と共に各地を旅した印象などをもとに作曲したピアノ曲集「巡礼の年」のなかで、「第2年:イタリア」は、全7曲から成る。そのなかの第4曲・第5曲・第6曲は、いずれも「ペトラルカのソネット」と題され、1838~39年にイタリアで作曲された。14世紀イタリアの偉大な詩人ペトラルカの「抒情詩集」に含まれる3つのソネット(14行詩)にインスピレーションを得て書かれた曲だが、元来は歌曲として作られていた。第5曲としてある「ペトラルカのソネット第104番」は、「私を救って下さるのは、あなただけです」といった内容を歌ったもの。救いの手を求めて揺れ動く心情を、リストは、アダージョ、ホ長調の曲に託し、ロマンティックに表現している。

夜想曲「眠られぬ夜、問いと答え」S.203

リストの最晩年、1883年に書かれ、「トニ・ラーブの詩による夜想曲」という副題がついた曲。「速く、情熱的に」と指示されたホ短調の部分と、「アンダンテ・クイエート(穏やかな、静かな)」と指示されたホ長調の部分から成る。標題にある「問いと答え」に照らし合わせると、不安な曲想の前半が「問い」であり、その音型を用いた、落ち着いたコラル風の後半が、「答え」かもしれない。

3つの演奏会用練習曲 S.144より 第2曲「軽やかさ」

1848年ごろの作とみられる「3つの演奏会用練習曲」は、リスト自身の卓越した演奏技巧を披露するための練習曲というよりも、サロン風のロマンティックな小品集のような趣を持つ。もともと、のちにフランスで出版されたときには「3つの詩的な奇想曲」と題されていた。各曲の標題も、フランス版に見られるものであり、リストによるものではないが、通称として広く用いられている。その第2曲「軽やかさ」は、ヘ短調により、ア・カプリッチョと記された序奏に始まる。続いて、クアジ・アレグレットの主部となり、3連符を主体とした、流れるような主旋律が現れる。曲が進むと共に、さらに細かな連符が用いられ、流麗にして繊細な美しさを紡いでゆく。

凶星!(不運) S.208

ドイツ語で「凶星!」、フランス語で「不運」と題されたこの曲は、1880年以後の作と推定されており、リストの死後、1927年に出版された。レントで書かれたこの曲では、増三和音が多用されていることや、増四度すなわち三全音が、旋律の構成要素として用いられていることなどに、最晩年らしい作風が表れている。さらに、低音部の不気味なトレモロの上で、増三和音が半音階的に上行する場面や、調が不明瞭ななかで突然、ロ長調のカデンツが現れる場面なども特徴的である。リスト最晩年の、前衛的とも言える小品群には、晩年に宗教生活に入ったリストの、いわば孤高の境地が、反映されているのかもしれない。

2つの演奏会用練習曲 S.145

1862～63年ごろの作と推定されているこの練習曲集も、「3つの演奏会用練習曲」と同様、サロン風の小品集のような印象を与える。なお、リストの練習曲で標題を持つものは、出版の際に名づけられたが、この2曲は例外的に、各曲のドイツ語の標題を念頭に置いて作曲されたという。

第1曲「森のざわめき」：ヴィヴァーチェ、変ニ長調。風にそよぐ木々のざわめきを思わせる細かなパッセージのなかから、ロマンティックな旋律が浮かび上がる。

第2曲「小人の踊り」：プレスト・スケルツァンド、嬰へ短調。幻想的な雰囲気を持った楽想が、転調を繰り返しながら続く。そのなかでの斬新な和声進行は注目される。

暗い雲 S.199

リスト最晩年の、後の時代の音楽を予告するような、実験的な小品のなかには、無調の傾向を示すものもある。1881年に作曲され、彼の死後、1927年に出版された「暗い雲(灰色の雲)」は、その顕著な例である。アンダンテにより、ト長調の調号で書かれてはいるが、曲中では、増三和音が半音階的に下行したり、旋律的ジプシー音階が用いられたり、さらには、徹底した半音階主義を示す場面もある。そして、調の感覚の希薄な、不思議な響きのなか、最後は、全音階で構成された和音で終わる。

ハンガリー狂詩曲 第11番 S.244-11

リストが1839年から1847年の間に書きためていた「ハンガリーの民族的旋律」をもとに作曲した「ハンガリー狂詩曲」全19曲のうち、第15番までは1846年～52年ごろの作と推定されている。各曲は、ハンガリーの舞踊音楽「チャールダーシュ」の形式に従い、遅く荘重な「ラッサン」と、速いテンポの激しい「フリスカ」から成るが、第11番では、この2つの部分が、さらに2つに分かれている。「ラッサン」の前半は、イ短調。「ツインパロンのように」との指示どおり、ハンガリーの民俗楽器ツインパロンを模した音型で始まる。「ラッサン」の後半からイ長調に転じ、やがて、活気に富む「フリスカ」に入る。コーダとも言える「フリスカ」後半は、嬰へ長調となり、テンポをさらに速めて華やかに盛り上がる。

葬送前奏曲と葬送行進曲 S.206より「葬送行進曲」

リストの死の前年、1885年に書かれた「葬送前奏曲と葬送行進曲」から、後半の「葬送行進曲」。冒頭からオスティナートが執拗に繰り返され、やがて、その上に、増三和音や減三和音が入り乱れた不協和音が続いて、調をあいまいにする。静かな部分も垣間見られるが、再び最初のオスティナートが現れ、怒濤を表現するかのように終わる。